



TITLE:

臺灣遠征日記

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 臺灣遠征日記. 天界 1927, 8(82): 32-38

ISSUE DATE:

1927-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161217>

RIGHT:

臺灣遠征日記

山 本 一 清

本年11月10日の水星經過を觀測するために、臺灣まで行きたいものだが、かねてから望んでゐるが、10月20日に至つて、遂に「行く」に決し、すぐ旅行の準備、諸器械の考案、船會社其の他との交渉なぞした。11月2日、器械類を積み出す。——行く先は、とにかく臺北へ。

11月4日(金)、朝7時53分、京都驛發。手荷物二つミクロノメーター、それに傘を携へたのは、天文觀測旅行にふさはしく無いと思つたが、此の日雨天なので止むを得ない。9時33分、神戸市三の宮着、それより人車で、海岸第四突堤に船泊中の大阪商船「扶桑丸」一等第3室に入る。英子はこのまゝまで見送つて來たが、船の出帆にはまだ間もあるので、買ひ物をかねて、二人で暫く市街を散歩。11時半、船に歸る。英子は11時50分船を去る。船は正午拔錨、多數の船客を見送り人との間を結ぶ多くの tape を切り裂いて岸壁を離れる。自分は此の時、クロノメーターを上甲板に持ち出して、税關屋上の Time-ball 落下時刻を觀測。

細雨降りしきる海の上を、船は西へ走る。風は無く、波はおだやかであるが、誇らしい瀬戸内海の景色も好くは見えない。たゞ讀書にふけるのみ。

11月5日(土) 朝6時、眼がさめると同時に戸畑の室積氏より無電で上陸講演の依頼あり。船は6時半門司港外に投錨、自分は直ちに上陸、商船棧橋で室積氏に迎へられ、案内されて、汽車で戸畑へ行き、9時明治専門學校に着、9時半より約1時間、學校の職員生徒に「水星の太陽面經過の現象」について講話。終つて、自動車にて送られ、11時半船に歸る。船は正午出帆。此の時にも門司港の Time-ball をクロノメーターで觀測。

空は曇り勝ち、船は玄海へ出た頃から北風の横波で、可なり揺れたが、日没と共に平靜に復した。自分は相變らず讀書。夜10時には就床。夜半に時計は30分おくれる。

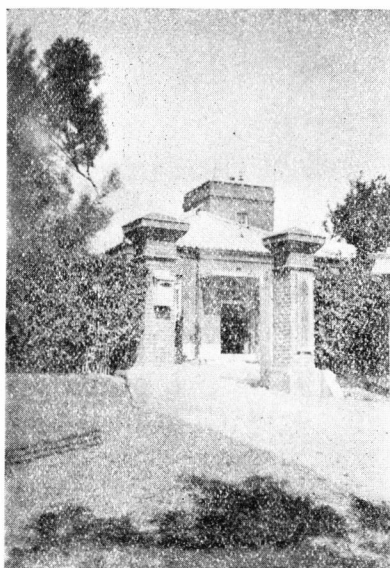
11月6日(日) 船の中では、日曜も特別の有難みが無い。朝食後、水星經過の計算なぞやり直して見た。——其のほかは、談話室の書架から臺灣

に關する書物を引き出して讀み耽る。風は北西の微風が船を追ひ、波は無く、船は海上を迂るやう。しかし空はやはり曇り勝ちで、日没の時のGreen ash も遂には見られなかつた。

正午の時の船の位置、東經126度7分、北緯30度24分、昨日門司出帆以來航走346浬、平均速力14浬5。

11月7日(月) 天氣幾らか良く、風は北西。日光が時々窓より入る。

午前11時、船首に臺灣の前肖 Agincourt 島が見え、船客の眼を喜ばす。正



(臺中測候所)

午此の島を通過、それから次ぎ次

ぎに幾つかの島々を送り迎へ、午

後2時には臺灣本島が視界に入る。

3時半、いよいよ、基隆港内に入り、徐行。此の時早くもランチで

自分の恩師吉川氏父子及び寺本臺

北測候所長に出迎へられた。船が

岸壁に定着作業の間、自分は取り

敢へず寺本所長より臺灣各地の氣

山象狀況を聞き、熱心且つ親切にす

本すめられるがまゝ、遂に今回の觀

撮測地を臺中とするに決定。望遠鏡

影類の荷上げ等については船の事務

長及び商船會社の代理者等に依頼

し置き、上陸して午後4時20分發

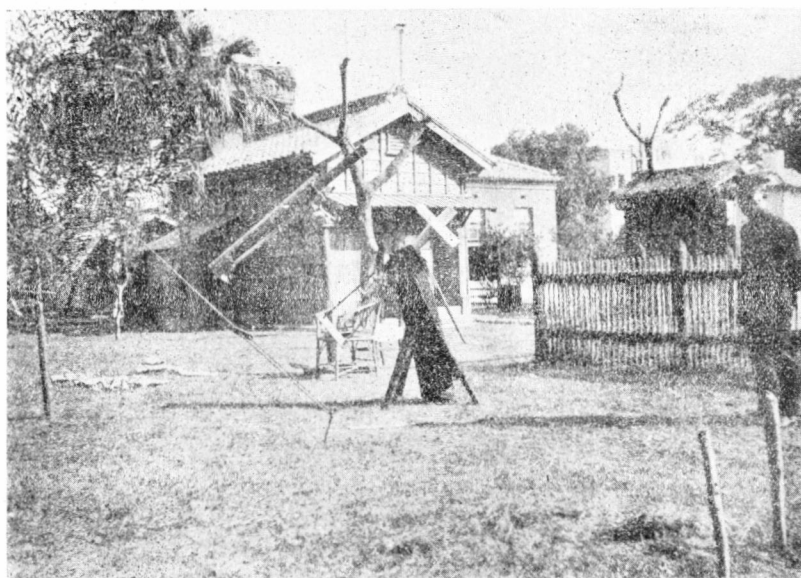
の汽車にのり、一先づ臺北に下車、旅館朝陽號に入る。

夜、寺本所長、舊友速水和彦技師、平賀牧師、見元了氏及び、意外にも河合章二郎氏來訪、10時過ぎまで談ず。

11月8日(火) 朝、8時過ぎから寺本所長に案内されて市街を歩き、總督府を訪ふた。目下、朝香宮御滯臺で奉迎のため總督府の人々は多く南部の行啓に従し、内務部長其の他にも會へず、只、建築の大體を見、高さ200尺の塔に登つて市内外の景色を賞した。午後10時半からは、更に轉じて

文武町の測候所を訪ふた。八角形の珍しい建築であるが、目下修繕作業中。所長室で少憩後、屋外の観測場で同所所蔵のCooke製「四吋」の天文望遠鏡を見、ついで子午儀室内を見た。こゝにはCooke製の「二吋半」子午儀が据ゑ付けられて居り、其の隣室にはRiefler製の天文時計2つ、及び、Nardin製とLe Roy製のクロノメーターが各各1個があつた。4個の時計は毎日相互比較が行はれ、天測は毎晴夜に行はれるこの事であつた。——正午辭去。

午後0時46分、臺北發の急行列車で臺中に向ふ。車中全く獨りであつた



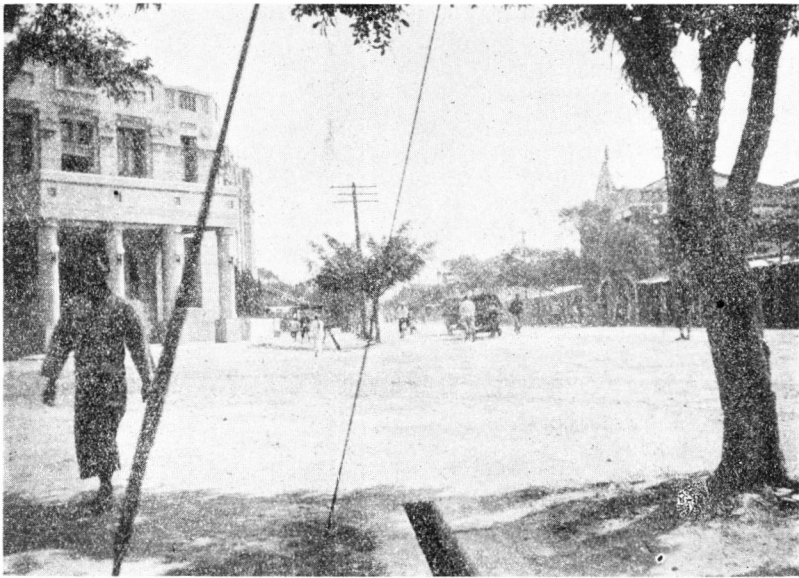
（臺中測候所内の観測場） 山本撮影

が窓外の珍しい景色を讀書まで時を費した。3時過ぎから汽車は海岸に沿ふて走り、通宵を過ぎた頃、明後日の水星第4觸頃の太陽高度を目測した。水平線上の日没は、生憎、地物に妨けられて見えなかつた。5時半、追分驛で圖らずも臺中測候所長伊地知氏に出迎へられ、臺中に着くまで車中で既に臺中の大體を聞く。

午後6時臺中着、林教育課長其の他に出迎へられ、旅館春田館に入つたが、空の晴れてゐるのを幸ひ、時を移さず、所長の案内で測候所に行き、器械の据ゑ付け場所を見分した。北極星や、春分點近くの木星なきが好い

目標であつた。

11月9日（水）朝8時、望遠鏡の荷物が臺中驛へ無事到着し、直ちに測候所へ送り出した。いふ電話が驛長から届いたので、9時から自分も測候所へ出かけ、所員の方々に手助けして頂いて荷を解く。午後、之れを屋外に持ち出し、昨夜、星を見て決定して置いた場所に据ゑ付け、組み立て、adjustment を、4時頃には、終る。4時30分は明日の水星が終る時刻に當るのだが、今日の試験では、望遠鏡の視界は何ものにも妨けられず、天



（臺中の市街） 山本撮影

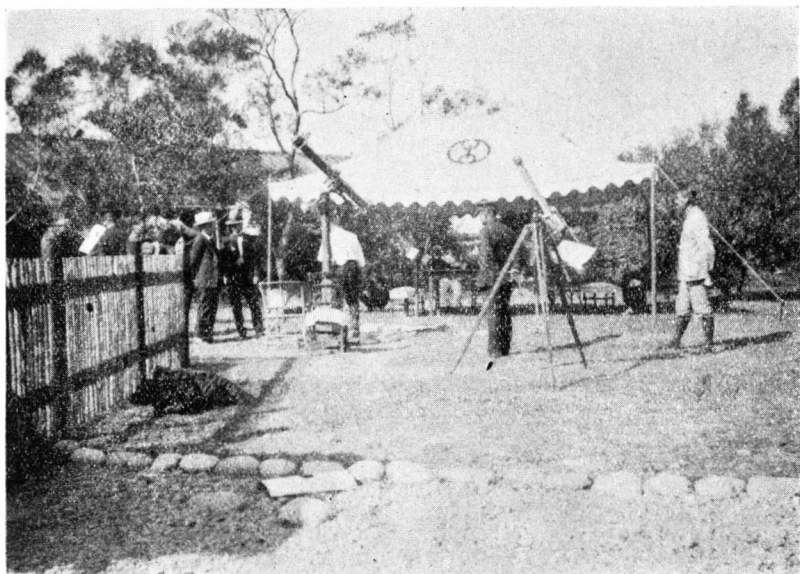
氣さへ好ければ豫想通り観測が出来るこそが確められた。今日は終日快晴、明日も望みが多い。

午後7時、市内の高等女學校講堂に於いて州教育課主催の學術講演會に招かれ、約1時間半にわたり、幻燈畫を示しつつ、天文講話をした。

11月10日（木）午前6時起床、椽に出て空模様を見たところ、風は無いが、淡い卷雲が空一面にはびこつてゐる。少々之れが氣がかりであつたが、7時過ぎ、食事を終る頃、雲は明らかに消散の様子なので安心した。8時には服裝を整へて測候所に行く。雲は殆んだ消えた。測候所では所員

のほかに見學の中等教員たち、新聞記者等、數名が來てゐる。小型望遠鏡も二臺運び込まれてゐる。

直ぐ自分は10センチ赤道儀望遠鏡の掩ひを取り去り、各部を一應點檢、9時には臺北測候所に電話をかけて、時刻の比較をした。それから又、觀測場に歸つて來て、まづ、投影法により太陽面の sketch をし、黒點の位置を測る。黒點は今日總計6群見えてゐるが、何れも過去二三日間に著しく發達したもの、又は出現したものらしい。中央にある大群には約10個の大小



（其の日の觀測場） 山本撮影

黒點が含まれてゐる。此の sketch を office に持ち歸つて、其の上に今日の水星經過の track を書いて見た所、幸ひにも第一觸が、太陽東縁に昨日から現はれた一大黒點のわづか南の點で行はれることを知つて、大喜び。尙ほ此の上、水星が幾つかの黒點上を通過しないものか、研究して見たが、其れは駄目であつた。しかし、とにかく、觀測技術上、最も心配であつた第一觸の位置角が此の一黒點によつて示されてゐることは有難い。これで自分はいよいよ今日の觀測を直接眼視法によつて決行するに定める。10時、二臺の小望遠鏡の据ゑ付け、投影準備も出來たので、部署を決定。師範

學校機には川口、松本、小林の3氏、記念館機には中島、磐井兩氏が當るこまこし、時計係は伊地知所長が當られるこまこなる。氣象觀測の今日の當番は上村氏。それから、自分は一同を集め、投影紙上の太陽像を示しつつ、今日の現象をあらかじめ説明した。——測候所の正門は既に朝8時半から閉鎖して、外來者を斷る。天氣に申しぶん無し。

午前11時の第一觸迫り、時計係りは早くも10時55分から「秒時」を呼び始める。自分は10センチの全口径を用ゐ、倍率133倍にサングラスを當てて太陽面を直視。太陽像は極めて靜かである。第一觸を $15^h 16^m 55^s$ (クロノメーター面) に確認。それから第二觸に注目し、geometrical contactを同 $18^m 27^s$ optical contactを同 $18^m 30^s$ に觀測す。11時7分に一同觀測を中止し、或は休息、或は食事をこる。自分は少憩後、正午には臺北測候所より來る電信報時を觀測し、それから一寸宿へ歸つて食事。

午後1時半、自分は再び測候所に出て、かねて計畫準備して置いた小型カメラ、シャッター、フアインダー等を赤道儀に取りつけ、四五人の方々に手傳つて貰つて、今、太陽面を經過中の水星を寫眞撮影する試験に移つた。Ilford Process 乾板を京都から持つて來たが、測候所内に適當な暗室が無いので乾板の取り換へ等が出來ず、止むなく、近所の一寫眞館まで或る特志者に自轉車で往復して頂くといふ騒ぎなごしつゝ、こにかく、前後6回撮影をやつた。其のうち、3回はシャッターの働きが不良で、不成功。しかし、残りの3枚は可なり良い結果を得た。午後3時には再び電話で臺北の時計の比較。

午後4時8分の、第6枚目の寫眞撮影を最後こし、一同記念撮影をやり、其の後は、第三觸と第四觸の觀測準備をする。各器械への人員部署は午前中の通り。天氣は依然良好、氣温は可なり高いが、北の微風がある。太陽は西によほご傾いたけれご、像の性質は極めて良好。自分は第三觸の optical contactを $20^h 42^m 19^s$ に、又、geometrical contactを同 $42^m 25^s$ に觀測。引き續き第四觸を $20^h 43^m 56^s$ に見たが、しかし之れは少々怪しいか(?)。同 $44^m 3^s$ には確かに水星が見えなかつた。

午後4時40分、一同の觀測作業は全部終了。赤道儀は直ぐ部分品を解い

て荷作り、多くの人々に助けられた御蔭で、5時半には早くも全部のものが荷箱に納まつて、運搬業者の手に渡された。今夕すぐ驛から積み出し、明日の船に間に合ふ筈。

午後6時、自分は測候所を引き上げて宿へ歸り、食事の後、入浴、くつろぎつゝ、今日の観測結果のあらましの整理。寫眞屋からは水星寫眞の現象も出來上つて來た。午後8時、約束により新聞記者を引見、大略を説明報告す。結局、水星經過時刻の、観測と豫報との差は -32^s （豫報が遅過ぎ）であつた。——それから暫く休息して、夜半過ぎの急行寢臺車で臺中出發、臺北へ。

11月11日（金）朝6時32分に臺北着。宿で少憩後、8時半、測候所を訪ね、所長始め所員の方々に數日來の厚意を謝し、尙ほ、昨日の臺中に於ける観測状況を大略講話した。聞けば、臺北では終日空に雲が往來して、水星經過の第三觸以外は皆観測不可能であつた由。

10時から、鐵道部の速水技師と寺本測候所長との案内で、鐵道部の自動車により、市の内外、臺灣神社あたり迄ドライブ。正午にはホテルで午餐を受け、午後0時50分發の汽車で、見送られつゝ基隆へ行く。基隆では吉川中學校長に迎えられ、まづ同校に案内せられ、學生たちに簡単な speech の後、鐵道部のランチで港内巡覽。——午後3時半、扶桑丸に乗り、4時豫定の如く出帆。

11月12日（土）風は北西で、波は可なりあるが、船はゆれない。終日、讀書したり、散歩したり、無駄話しをしたり。同船の船客中に加福均三博士等の同好の士多く愉快であつた。正午の船の位置は、東經124度26分、北緯28度6分、昨日より航走232浬、速力平均11.9浬。

11月13日（日）風が西南に變つて、船足進む。やはり讀書と散歩とで終日を送る。此の航海中にも、天氣は概して好からず、殊に水平線にもやがあつて、Green Flash が観測出來ない。正午の船の位置、東經128度19分、北緯31度54分、昨日より航走309浬、平均速力12.89浬。

11月14日（日）船は未明に門司港外に着し、7時半同港内に投錨。自分は直ちにランチで下關に上陸。午前8時40分發の急行列車に乗る。——午後5時20分、岡山驛で幹事水野氏に見送られた。岡山でも倉敷でも、水星の初觸観測は曇りで駄目であつた由。午後9時半三宮驛で英子の出迎えを受け、11時京都市無事歸宅。（終）